

ふれあい雪谷

平成18年

もみじ号



(東雪 林 恵三 さんの作品)

ツバメからの贈り物

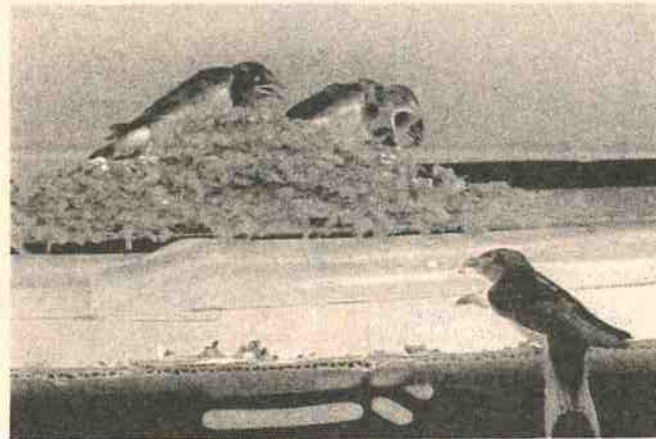
1枚の写真にまつわる話を書きます。

私がよく利用している、長原駅の改札前案内表示板の上でツバメが5月12日頃から巣作りを始め、7月3日に4羽のヒナが無事に巣立ちました。この間、多くの方が巣作りと子育てに興味を持って見守り、ヒナがかえってからは子ども連れの人たちが巣を指差して説明している風景をよく見かけました。ヒナを見て喜び子どもたちの笑顔は、昨今の児童が被害者となった殺伐とした事件の続く世の中で絶対失ってはいけないものではないかと思ひます。

駅員さんと巣を眺めながら、雑談をする人をよく見かけました。ヒナに名前をつけた子どもさん多いと聞いています。

都会で失われていく自然、ツバメもまた都会から消えつつある今、目の前で生の自然に触れることができるということは大変貴重なことでもあり、ツバメの親が一日何十回も餌を与えている姿は感動すら覚えます。駅を利用する人たちの中には、糞害等で迷惑な営みと思われる人もいるかもしれません。しかし、自然と共生することも我々には、必要なことではないでしょうか？皆さんはどのように思われますか。

(小池 栗原 裕子)



「編集後記」

九月に入り、一気に秋がやってきた。最近、八月三十日には、二十十六年夏季オリンピックの国内候補地として、東京都が決まった。九月六日には、紀子さまが、男の子をご出産されたことなど、明るいいビッグニュースが続いている。今後のオリンピック会場の正式決定や、皇位継承問題などの行方を、注目していきたい。

(笹丸 横田 順)

〔発行〕わがまち大田雪谷地区推進委員会

〔編集〕ふれあい雪谷編集委員会

連絡先 雪谷特別出張所

大田区東雪谷四三三二

電話 三七二九一五一一七

〔発行日〕平成十八年十月一日

通巻第六十四号

七月一日から、ふれあい雪谷の編集委員が替わりました。

南雪谷自治会

(新) 太田 眞弘 (旧) 飯田 七造

私の健康法25

もうすぐ七十歳になる私は、何も健康法らしきことはやっておりません。幸いに丈夫に生まれ丈夫に育ち、極寒の地方で子どもの頃から家業を手伝い、カゼもひかず、学校も休むことなく、色々なスポーツに参加してきました。これが体力をつくる源であったかと思ひます。

上京してからは、自分の生活のために働きました。

四十歳の頃から踊りを始め、現在は仕事と踊りで忙しい毎日過ごしています。気の合う仲間恵まれ、笑い声の絶えない時間はあつという間です。

身体を動かすことや働くことは子どもの頃から覚えたもので、何の苦勞とも思いません。これが私の健康法かもしれません。



(希望 M.K)

心身共に健康であるよう心掛けていきたく思います。

サークル紹介 33 社交ダンス・サークル 「マロニエ会」

マロニエ会が誕生してから二十四年の歳月が流れ、集まり散りし人は変わりましたが、終始一貫変わることなく「楽しい、美しい、正しいダンス」をモットーに指導される臼田俊子先生・野崎三郎先生の深い愛情に、当サークルは支えられてきました。

活動日は、毎週金曜日の午後。現在登録会員は十五名程ですが、出席者は十名以内という、ごく少人数のサークルです。しかし、少人数がゆえ両先生からの指導は隅々まで行きわたり個人レッスンと同じ気分を味わうことが出来るのが、当サークルの特徴といえます。いつでも、誰でも、見学・体験自由ですので、お越しをお待ちしています。

雪谷文化センターを活動の拠点とするダンス・サークルは、他にチロリン村(火曜日夜間) 研和(日曜日午後)があります。



今年も文化センターふれあいまつりの一環行事として、十一月五日(日)午後一時から合同のダンス・パーティーが開催されます。入場無料、普段着でお気軽にご参加ください。

(南雪谷 立麻 裕穂)

大人は子の鏡、子は大人の鏡

昔から親は子の鏡といい、子は親の後姿を見て育つ。また、子を見れば親がわかるともいわれてきました。

「今の若い人たちは…」はいつの時代にもその時々年に重ねてきた人たちが口にする言葉です。確かに教育も時代の流れとともに様変わりし、子どもはのびのびと自由に…とされ、あいさつの仕方、マナー、口のきき方等々が乱れてきていることは確かかもしれませんが、自由で伸び伸びがいけないことではありませんが、規則があってこそその自由なのです。自由のはき違えは危険なことです。

昨今核家族が増え、目上の人たちが教えること、目上の人たちに教えられる機会が少なくなりました。年を重ねている人たちも昔に比べて元気ですが、「若い人たちは若い人たちで」と、口も出さず手も出さずということが多くなってきていることも事実です。若い人は若い人でお年寄りの世話にはならず、今は大変充実している公共の場や地域の組織を利用して、同年代の仲間と互いに干渉を避けつつ情報交換をしている。

昔は地域・公共の場といえば子どもたちが集まる駄菓子屋やおもちゃ屋、銭湯といったところ。そこではオジさん、オバさんたちに接し、話をしてもらったり、注意されたり叱られたり、ほめてもらったりしながら自然としつけがなされていました。

今、公共や地域の場を利用していながら何か起きたときには、「行政がキチンとしていなかったのではないか」「注意書きが書かれていなかった」等、権利をやたらと主張し相手方を悪とする自己中心型が少なくないように思います。

しかし、「今の若い人たちは…」に当てはまらず、しつけ・マナー等がきちんとでき、他人への思いやりや感謝する心が身についている若い人たちもたくさんいることも事実です。それはやはりその方の育ちの中で受け継がれ、身につく、習慣づけられてきたあかしであると思います。自分の子どもたちに伝え、いつの間にかつぎつぎと受け継がれていく。なんとすばらしいことでしょう。

しつけは大人が子どもに贈る最高のプレゼントです。親のみならず地域社会全体の大人たちが子どもたちの鏡となり、やがては子どもたちが大人の鏡として大きく健やかに成長し、安心して生活でき、潤いがあり、にぎやかな子どもたちの声が聞こえる地域社会に発展していくことを願いたいものです。

(上池上 F. O)



この情報紙は古紙10.0%の用紙を使用しています。

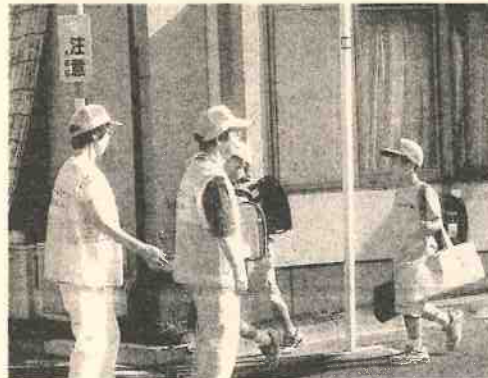
「おはようございます！」“オハヨウゴザイマース！”
「さようなら！」“サヨナラ！”と子どもたち。
5月連休後、手始めに普段着で自宅前の小池小学校通学路に立って呼びかけました。“ナニ？コノオバサン？”と要注意の不審顔。

翌日からは「防犯パトロール」・「小池自治会」の鮮やかな文字入りブルゾン・区章入りの帽子といういで立ちにしました。と、ご近所さんは“オーっ？”。今度はピッタシ！日増しに子どもたちの声は大きく元気に、そして親しみに溢れたものとなり、今日に至っています。お母さん方からも“いつも有難うございます”とごあいさつをいただき、大きな励みになっております。

昨今の状況です。小池小学校の「登下校時の児童を絶対安全に！」との自発能動の熱意でシニア・クラブ小池白寿会として始めました。「継続は力なり」です。やがてはPTA・同窓会員、犬と散歩の方、それぞれ「ご近所の底力」を総結集して、何としても「未来の宝」を魔の手から守り続けたいと思います。

今日も私なりに顔も声も若々しくして？見守っています。

皆様、どうぞこのボランティアにお力添えをお願いします。



(小池 田中 喜代子)

美しい環境づくり 21



秋は味覚というか、「実」のなるものの収穫期ですが、私たちの目や口を楽しませてくれる季節でもあります。

ぶどう・梨・栗・柿・みかん・りんご等ハウスで早く出回る物も多少ありますが、各家庭でも自宅の庭で穫れたのを食することもありました。しかし現在は、ほとんど目にすることがなくなりました。

時代の流れで、土地は分割され庭に木々が植えられるほどの余地がなくなったことはもちろんですが、なんだか人間の心、気持ちの変化も見受けられるような気がしてなりません。

地域によってはまちなみ条例等を作り環境等に特に力を入れている所もあるようです。自然の緑があって美しい街になれば一番いいのですが、せめて地域が心のやさしさのある環境であって欲しいと願っています。

これからは高齢者が多くなり若い人たちが少ない時代となります。事実近隣の子どもの数々が本当に少なくなりました。

ご近所との絆を強くして、みんなで助け合い明るく心優しい街になるといいですね。

(東中 T. N)

自治会リレー随筆

「火事だ！」 火の元に気をつけましょう

7月1日夕方6時頃、池の台自治会地域で火災が発生しました。不幸にも72歳のご主人が、全焼した家の中から、遺体で見つかりました。家族の人たちは外出中で留守でした。この日は無風状態で、煙は一直線に立ち上っていました。近隣の人たちが騒々しい異変に気づいて、煙を目標に集まってきました。

消防自動車5～6台・救急車・パトカー等すぐに来ましたが、住宅密集地帯で、現場付近で立ち往生が続いていました。連絡を受けた出張所の職員、自治会理事も心配して見守りました。関係者の労あって鎮火した夜、間借りの住人の一人が出張先の福島県から急ぎ戻ってきました。「もしや自分の部屋が火元では」と、誠実な若い好青年でした。その一言で同情した理事の話合いで、一夜を自治会館で過ごしてもらうことになりました。出張所から毛布が、近所の奥様から和食の温かい朝食が、差し入れされました。

ふるさとを後に社会人となった青年の胸のうちはどうでしたか、東京にも心温まるふるさとがあったのかと、気づいてくれたでしょうか。

この住宅密集地域にあって類焼をさせなかった、消防活動と新建築素材の素晴らしさに感動いたしました。

もうすぐ冬期に入ります。個人個人が火の用心に注意して、近所に迷惑をかけないように気をつけて大事な財産を守って住みよい町づくりを、心がけようではありませんか。

関係者の皆様いろいろお世話になりました。

(池の台 K. O)

母校の思い出 27

中学にて

初めて袖を通した学生服は、かつての軍服そのままのようで、つい先ほどまで小学生だった私には、うれしさなど、みじんもなかったただ、嫌悪感だけがあった。ツメエリは角が当たって痛い上に、ホックをかけると、まるで首を絞められているかのように息苦しかった。制服には靴の指定がなかったから、ふだん履いている運動靴を使ったが、どこかちぐはぐで、自分でもおかしかった。与えられた布製の白いカバンだけは、おぼろげながらも中学生になったことを自覚させたが、上級生の、まるでラクガキ帳のようなそれは、ひどく憂うつな気分させた。

数学が好きだった。小学校での“さんすう”が、中学では“数学”と名を変えた。数に対する考え方はそれ以上に大きく変化していて、対象を値のある数値だけでなく、記号を用いたり、グラフで現象を表すことが新鮮だった。例えば、割り切れない数を無理数と呼び、記号を使って表し、それをそのまま計算する。そんな合理的な考え方を美しいと思っていた。しかし、学校で懸命に勉強すると、同級生たちにはおもしろくなかったのか、よく、からかわれた。そんな彼等の行為もまた、私を憂うつにさせた。

うっ屈したものを発散させようとして、逆に周囲からいさめられ、押さえつけられことも度々あった。年齢を一つ増やす度に、少しずつ窮屈になって行く気がしていた。

だから、自分の声を大声で出せる何かを探そうと努めた。それが中学3年間の一歩の収穫だったと思っている。

「オレハココニイルゾ」…と。

(石川台 豊田 哲行)